

論文 Today

アウトソーシングされる自己——自分の生活/人生 (life) のために他者を雇うときに起こること

Arlie Russell Hochschild (2012) *The Outsourced Self: Intimate Life in Market Times*, Metropolitan Books

お茶の水女子大学大学院 橋本 嘉代

資本主義や市場原理は私たちの生活や自己認識にどのような影響を与えるか。アダム・スミスやマルクス、ウェーバーなどをはじめとし、数多くの思想家や研究者が格闘してきたこの問いに、「感情労働」概念の提唱や共働き家庭のワーク・ライフ・バランス研究などで著名なアメリカの社会学者ホックシールドが挑んだ。著者が注目するのは、個人的/私事的な領域で有償のサービスを利用するときに私たちの生活や感情、家族・コミュニティとの関係、自尊心 (self-worth) などに起こる変化である。

構成は、まず序章で二つの対極的な生活様式が示される。著者が幼い頃から毎年夏休みを過ごした父方の実家の農場（東海岸のメイン州ターナー）では、農作業や家事などの生活の中の数々の仕事は「ただやるのみ ("just do")」の精神で、子どもも含めた「村」の全員でシェアされ、家族や隣人との間には信頼にもとづく互酬的な関係が形成されていた。これに対し、外交官である父と共に家族が暮らし始めた中東の大使公邸では、身の回りのすべてをお金で雇った使用人たちに委託していた。豊かな大国アメリカの威信を示す特権であるが、ここには、必要な仕事をすればするほど敬意と尊敬を集めた「村」とは異なる「市場」(marketplace) の論理が働いている。この二つの対立する論理が本書のキーとなる。序章終盤で著者のおばが登場する。彼女は20代で夫と死別後、母の実家の農場跡地で独居を続け、94歳で要介護になった。おばは自立心旺盛で、実際にはできなくなっているのに「自力で何でもできる」と主張し、救急隊員やプロの介護者などの見知らぬ他者が家に入ることを強く拒絶した。土地と自宅に愛着が強く、著者が住む西海岸への転居にも応じない。自身がこのような“ケアの危機”に直面したことが、本書執筆のきっかけだという。

著者によると、アメリカでは、生活やイベントの際に有償サービスを利用する「個人生活の商業化」が、一部の富裕層のみならず中流階級にまで浸透してい

る。恋愛、結婚、出産、育児、介護、葬儀など人生の各ステージでプロのサービスを利用する側と提供する側の双方を著者は「市場の先駆者」と呼び、アメリカ各地で彼らにインタビューを行った。その結果が各章に収められている。

永遠のパートナーとの自然な出会いを求めつつも時間に追われている40代女性は、「恋人探しは職探しと同じ」と語る著名な恋愛コーチを雇い、世界最大の恋愛モールであるインターネット上で自身のブランド化に励む。不妊治療中の女性は、貧しいインドの女性に卵子を託し代理出産を依頼したが、相手に「金にものを言わせる偉そうなアメリカ人」と思われなかと気を揉む。一方、代理母は子宮内で成長する赤ちゃんに湧いてくる愛情に戸惑う。IT企業で働く多忙な母親は、幼い娘の世話をフィリピン人のナニーに任せているが、彼女の愛情深さや温かさは第三世界の「村」出身ゆえと考えている。しかし、ナニーは幼少時、母親から放置され、時折しつけと称して殴打されて育った。夫のギャンブルによる家計破綻のため子どもたちを置いてアメリカに出稼ぎに来た彼女は、テレビのトーク番組で人との接し方やアメリカ流の愛情表現法を学んだのだ。このような、家族や友人のような親密さや信頼と同時にプロのサービス保証を求めるという「村」と「市場」の論理が混在する状況下での葛藤や混乱を、著者は丁寧に聞き取っている。このほかに本書が取り上げるサービスは、介護や結婚産業など日本と共通するものもあるが、日本よりも多種多様である。また、日本では商業的な取引が禁止されている生殖医療が含まれる点、発展途上国出身のケアワーカーが多い点が、日本とは大きく異なる。具体例を挙げると、レンタル家族、赤ちゃんの寝かしつけ、おむつ外しトレーニング、開運のための名づけ、独立記念日のハンバーガー作り、墓石の掃除……など枚挙に暇がないが、これらを単なる新種の仕事図鑑のように扱い内容の珍しさを面白がる読み方には実りが少ないの

で、本稿でこれ以上の字数を割くことは控える。

終章には、顧客との対話を通じて顧客自身の真の願望に気づかせるというウォントロジスト (Wantologist) が登場する。心理学の Ph.D を持っている彼女は「多くの人が人生を『航海』でなく『漂流』している」という。何も考えずに「ただやるのみ」と農作業や家事に取り組むことが規範化された時代とは異なり、現代は情報過多で選択肢が多い。「自分が何をしたいのかわからない」という自己決定の悩みがこの種のプロのニーズを顕在化させるのだろう。

ホックシールドは、援助のリソースとして民間業者を利用する人が増えた結果「市場」のパワーが強まったとし、その背景として、農業の衰退と都市への人口移動でコミュニティの基盤が揺らいだこと、女性の就労率や離婚率の上昇で家族が持つ「ケア」の潜在能力が弱まったこと、アメリカには他の西側先進国のように公的な家族支援制度がもともとなかった上に、それらを民間に委ねる傾向が規制緩和と政策で強化されてきたことなどを指摘する。近年は、多くのアメリカ人が長時間労働化と雇用の不安定化の影響を受けており、家族は今までにない苦しい状況にあるという。アメリカの公的サービスの脆弱さについては著者も問題視するものの、国家財政が厳しく、サービス充実化の財源確保には今後も期待できないとの認識だ。

著者は、以前の研究 (Hochschild 2005) では多忙による時間不足の対処法の一つとしてアウトソーシングを位置づけていた。

そこからの進展といえる本書の独自性は、自己評価や自分探しといった目的でプロの手を借りる行為への注目である。終章の「自分探し」のほかに、本書には自分がいい夫やいい父親かどうか、家族全員からの評価をプロの査定会社に依頼して調査する父親も登場する。このサービスの業者は自らの業界を「不安市場 (anxious market)」と呼んでいる。アイデンティティの確立や確認にまで市場の力が侵入しているのだ。

コミュニティの衰退化で、人々は企業が提供するカウンセリングや快適さ、サポートなどのサービスを自分が支払える範囲で切望するようになったと若者は考え、それが個人の自分への自信を失わせることにもつ

ながっているとみなしている。そして、進み過ぎた個人生活への市場の浸食を食い止めるために、個人が公的な生活とコミュニティにより大きくコミットすることの重要性を訴える。終章では「村」と「市場」の好ましい融合の例としておばの晩年のようすが紹介されている。自分と気が合い、同居してくれる若い女性介護者が見つかり、おばは若い頃のような快活さとユーモアを取り戻した。「見知らぬ人」とまるで家族のように笑いの絶えない数年間を送った後、98歳で大往生を遂げた。近所の人々も「ただやるのみ」の精神で何かとサポートしてくれて、彼女は幸福だった。……と学術的な考察が十分に行われぬままにハッピーエントの私小説風に締めくくられている結末には、やや拍子抜けの感もある。住み込みの介護者を雇うには経済力が必要だし、そもそも私生活のアウトソーシングは貧困層も含めた万人に可能ではないという問題が残る。著者の含意を探れば、打開策は「ただやるのみ」が良しとされた時代の価値観を再評価することであろう。これは Putnam (2000 = 2006) も示した現代の社会問題の一つ、コミュニティ崩壊の危機へのオーソドックスな対処法で、懐古主義的に家族やコミュニティを神聖視しすぎるきらいもある。しかし、時間のなさや自分への自信のなさをお金で埋め合わせる市場主義が現代のアメリカに根深く浸食しているのであれば、自分のことは極力自分でし、友人・隣人と無償の労働を交換し、信頼し合える人間関係を持つことが、個人やコミュニティの危機を救う有効な処方箋となるのだろう。

- Hochschild, A. R. (2005) On the Edge of the Time Bind: Time and Market Culture. *Social Research*, Vol. 72, No.2, pp.330-354.
- Putnam, R. D. (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*. Simon&Shuster (=2006, 柴内康文訳 (2006) 『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』 柏書房).

はしもと・かよ お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程。最近の主な著作に「育児期の男性を対象とする雑誌における新たな父親像の商品化」『生活社会科学研究』19号、2012年。社会学専攻。